

大阪を襲った地震と津波—正平（康安）地震（1361年）—

はじめに 江戸時代に大阪を襲った巨大地震、宝永地震（1707年）について、前回お話ししました。今回は時代を遡って、中世に起こった正平（康安）地震（1361年）についてお話します。大震災以後、古代・中世の地震への関心が高まってきています。南海トラフを震源域とする巨大地震である正平地震についても、最近マスコミで採り上げられています。津波高5～6mというような記事も見られます。史料が少ないという困難もありますが、正平地震の実像に迫りたいと願っています。この地震が起こったのは南北朝時代で、正平は南朝の年号、康安は北朝の年号です。正平16年(康安元年)6月24日、暁寅刻（午前4時頃）にM8¼～8.5の正平（康安）地震が起こりました。注）正平16年(康安元年)6月24日は西暦(ユリウス暦)1361年7月26日。

1. 地震と津波による被害 史料には、大きな地震が6月21日から始まって、大小の揺れが連日起こり、京都の東寺、奈良の法隆寺・薬師寺、和歌山の熊野三山など社寺の被害や、湯ノ峰の湯が止まったことなどが記録されています。24日の大地震で大阪の四天王寺の金堂が倒壊し、5人が圧死しました。津波が大阪湾にも侵入して被害を与えました。この津波について二つの史料が記述しています。『太平記』は、難波浦では半時（約1時間）ばかり潮が引き、無数の魚が砂の上で息づいていたので、付近の漁師たちが網や竿を捨て、一生懸命拾っていたところ、にわかには大山のような潮が押し寄せ、満々とした海になってしまった。数百人の漁師たちで、生きて帰った者は一人も無かったとあります。また、『斑鳩嘉元記』によれば、「安居殿御所西浦マテシオミチテ、其間ノ在家人民多以損失」とあります。

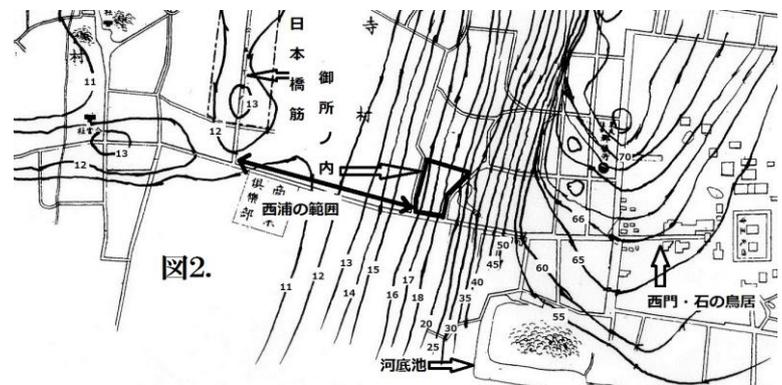
2. 津波が到達した地点・津波の高さ 「安居殿御所西浦」まで海水が到達し、海岸から「西浦」にいたる区間で民家や人命が多数損なわれたということです。津波が到達した「安居殿御所西浦」とは、現在の何処を指しているのだろうか？



・安居殿御所西浦とは何処か 先ず、「安居殿」については、四天王寺西門から西へ逢坂を約350m下った、現安居神社と考えられます。明治時代に内務省地理局測量課が作製した5000分の1大阪実測図に、「御所ノ内」という字名が記載されています。それは安居神社の西隣にあります(図1)。

「御所ノ内」という字名は、過去に御所があったという事実を伝えており、「安居殿御所」を指すと考えられます。「御所ノ内」の西の端には現在、合邦辻閻魔堂があり、この寺から西方が「西浦」と考えられます。次に「西浦」の西の端が何処であるかです。「西浦」の西端は、旧天王寺村の領域を越えない範囲、今宮との境界、日本橋筋と推定されます。それゆえ、「西浦」の範囲は、合邦辻閻魔堂の西隣から日本橋筋までの東西約350mの範囲といえるでしょう(図1)。

・「西浦」での津波の高さ 次に、「西浦」の地盤の高さを調べ、津波の高さを求めてみましょう。明治時代中期に原図が作成された『複製実測水準曲線記入大阪市街全図』によって地盤高を調べてみます(図2)。この地図の地盤高の数値は尺(1尺は約30.3cm)で表示され、高さの起点はT.P.±0.00m(東京湾の中等潮位)に近いと考えられます。近代以後、大阪市では地盤沈下が著しかったが、明治時代中期頃では、地盤沈下は確認されていません。地盤高は、最も高い「西浦」の東端で4.65m程度です。地盤高の最低値は約3.3m程度です。以上から、津波高(遡上高)は3.3～4.65mと言えます。安政南海地震の津波高3.0mより高いが、宝永地震の津波高3.6mと比べてどうでしょうか？本稿4.でも採り上げます。

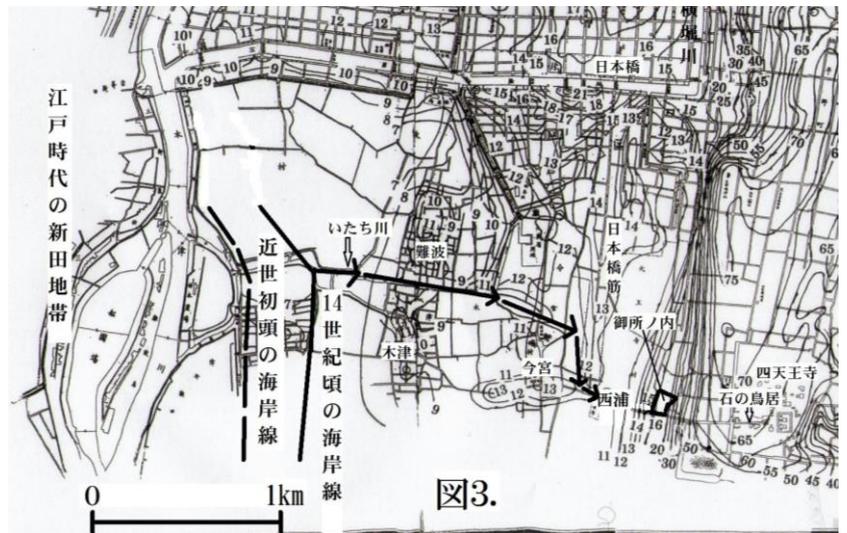


14世紀頃の海岸線と津波の遡上ルート 大阪湾の14世紀頃の海岸線については、文献史料も無く、先行研究も見られません。『源平盛衰記』巻47に、髑髏の尼御前が「今宮の前木津と云ふ所」から難波の海に入水した記事があります。平安末期

(12 世紀末)、木津に集落があり、そのすぐ西に海岸線があったと推測されます。近世初頭(16 世紀末)、新田開発以前の海岸線は、十三間川と木津川を結ぶラインであったと推定されます(図 3)。14 世紀頃の海岸線は、平安末期の海岸線と近世初頭の海岸線との中間付近(現・JR 芦原橋駅付近)に推定し、これを太い実線で描きました(図 3)。次に、津波の遡上ルートですが、地盤の低いルートを通ったと考えられます。いたち川を遡上するルートです。図 3 に、→で示しました。

3. 集落の地盤高と津波の高さ

難波浦に侵入した津波は海岸に近い集落を襲ったと推定されます。12~14 世紀の文献に見える木津・今宮・難波の地盤高を『複製実測水準曲線記入大阪市街全図』(図 3)によって調べました。木津の地盤高は約 2.7~3.3m、今宮の地盤高は約 3.3~3.9m、難波の地盤高は木津と同じ程度です。木津・今宮・難波の集落のある地域は周囲より地盤が高い。住民が居住を始めた頃から、水害から集落を守るべく、周囲より高い場所に集落を形成したと考えられます。



4. 湾岸集落での津波高(浸水標高) 『斑鳩嘉元記』

では、海岸から「西浦」に至る間の住家や人民が多く失われたと述べています。しかし、『太平記』では、海に出た漁師の溺死だけで、家屋の損壊や住民の溺死については何も書かれていません。記述に違いがあります。海に最も近い木津・難波では全域が浸水し、多数の溺死者があったが、地盤の高い今宮では浸水しなかった場所もあり、溺死者は少なかったと推定しました。津波高の最大値は、今宮の最も高い地盤高 3.9m 以下としました。また、正平地震の津波高は安政南海地震の津波高 3.0m よりかなり高いと推定し、3.3m 以上としました。結論として、正平地震の津波高(浸水標高)を 3.3~3.9m と推定しました。宝永地震の大阪での津波高(浸水標高)3.6m に近いと考えられます。

5. 災害緩衝帯としての干潟

新田開発が本格化する以前の大阪湾岸には強固な堤防などありませんでした。淀川の河口には広大な葭原があり、その先(海側)には砂州が形成されていました。河口付近は浅瀬が広がり、干潮時には砂州の沖合に広大な干潟が現れました。干潟—砂州—葭原と続く海辺一帯は津波や高潮といった災害を最も受けやすい地帯であり、人々が住めない場所でした。新田開発以前の大阪湾では、幅が 1~2 km に及ぶ無人地帯が人々の居住区をとり囲んでいました。木津・難波・今宮の集落はより内陸部の地盤の高い場所に位置していました。津波や高潮が襲えば、干潟—砂州—葭原の一帯は大きな破壊・攪乱を受けたが、自然災害の破壊力を弱める「緩衝地帯」としての働きをしたと考えられます。

おわりに 正平地震でも干潟—砂州—葭原は「緩衝地帯」としての働きをしたと思われます。2011 年の東日本大震災以後、より高い堤防を防災の柱とする考えがありますが、過去の人々の自然観や減災の考え方からも、学ぶべきものがあると思います。

参考文献: 長尾武「正平(康安)地震(1361 年)による大阪での津波遡上高」歴史地震 28、2013.

長尾武「正平(康安)地震(1361 年)による大阪での津波高、遡上ルート、湾岸集落への影響」京都歴史災害研究 15、2014.